

2023年2月26日（日）「責任転嫁からの解放」

ハイデルベルク信仰問答より

問9 神が、律法において、人間がなしえないことを要求するのは、不正ではないのですか。

答え いいえ、そうではありません。なぜなら、神は人間がそれを行ないうるように、お造りになったのであります。けれども、人は悪魔の煽動によって、故意に不従順となり、自分自身とすべての子孫からこれらの賜物をだましとってしまったのであります。

〔聖書協会共同訳〕

神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは極めて良かった。（創世 1:31）

そこで、一人の過ちによってすべての人が罪に定められたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。（ローマ 5:18-19）

教会というところには、異なる背景を持つ人々が集まっています。社会的な立場や年齢だけでなく、教理的な違いもあります。元々所属されていた教会があつて、何らかの事情で移られることもある。教わってきたことは、その教会の考え方によって異なる部分があります。それゆえに、同じ信仰問答書を学ぶことは教理の一致のために重要な意味を持つと言えるでしょう。

私は単立教会で生まれ育ったため、恥ずかしながら大学に入るまで教派教団というものが存在するということさえ知りませんでした。「クリスチャン」を一括りに考えていたのです。少し年上ではありましたが、一緒に入学した仲間で聖書にも教理にも精通している人がいて、大変驚きました。その人の勧めで初めてハイデルベルク信仰問答を読んだのですが、第一印象としては（翻訳のせいかもしれませんが）「言葉が固い」感じがしました。また内容については、「言葉遊び」をしているようにも感じられました。そんなにしつこく問わなくてもよいのではないかとともに思ったものです。今読んでみましても、少々ひねくれた人が、提示された答えに対して更に質問を被せているように見えるところがあります。それはそれで面白い。この本を書いた人が、こう答えたら次はこうくるのではないかと考えに考え、こねくり回し、これ以上質問が出なくなるまで答えようとした痕跡が見られるのです。実は、そのような作業は想像力が養われるので楽しいものです。読者はそんな執筆背景をある程度客観視し、自分の言葉に直しながら理解していくとよいでしょう。

今日は問9を扱いますが、前回の問8を受けた内容になっています。念のため振り返っておきましょう。

問8 では、私たちは非常に堕落しているので、善を行なうには全く無力であり、悪を行なう傾向があるのですか。

答え そうです。もし、私たちが神の御霊によって新しく生まれるのでなければ、その通りであります。

人間は根本的に善を行なう力を失っていて、神の御心を知っていてもどうしても逆らってしまう。しかし、御霊の働きによって人は神の御心を行ないうる存在に変えられるとも言われています。そして、今日の間いへとつながってくる。

問9 神が、律法において、人間がなしえないことを要求するのは、不正ではないのですか。

ここでの質問は、そもそも神様が人間を善が行なえないものとしてお造りになったのであれば、「善を行なえ」「神の法に聞き従え」と求めてくること自体が不当なのではないかということです。少々悪い言い方をすれば、「俺たちをそういうふうにしておきながら、できもしない要求をしないでくれ」と言っているのでしょう。まずここに人間特有の「責任転嫁」の問題がある。人間は基本的に責任を取りたくない傾向があり、常に責任の所在はどこにあるかを探しています。「すべての責任は私が取ります」と言っておきながら、一向に取ろうとしない人もいます。

人は何か失敗をすると、頭の中でグルグルと思い巡らし始めることがあるかもしれません。自分が石に躓いたのは、ここに誰かが石を置いていたせいだ。石に気づかなかったのは、誰も自分に知らせてくれなかったからだ。あいつが俺をこんな所に呼び出したせいだ。このように、終わりなき責任転嫁はどこまででも続いていきます。終いには、俺を生んだからだ、こんな世界が存在するからだ……というところまで行き着いてしまうかもしれません。そういう考えに囚われているとき、私たちのうちには何の反省も成長も解決もありません。もっと注意深く足元を見ていればよかった。トラブルに巻き込まれないように、常に危機管理をして生きている必要があった。すぐにそのように言葉を切り替えられることは重要です。

問9の質問はこれと似ています。私たちが善を行なえないのは神のせいではないのか。神こそ我々に不正を行なっているのではないか。それに対する答え。

答え いいえ、そうではありません。なぜなら、神は人間がそれを行ないうるように、お造りになったのであります。けれども、人は悪魔の煽動によって、故意に不従順となり、自分自身とすべての子孫からこれらの賜物をだましとってしまったのであります。

この回答の中には三つの要素が含まれています。

- ① 神は人を善きものとしてお造りになった
- ② 人は悪魔にそそのかされて自ら不従順の道を選び取った
- ③ 人は子々孫々に至るまで善を行なう力を失った

まず「神は人を善きものとしてお造りになった」であります。これを理解するためには天地創造の記事まで遡らなければならないでしょう。

神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは極めて良かった。（創世 1:31）

人間を含め、万物が神の目にかなうものであった。すべてが神の栄光を現し、完全なる美と秩序がそこに広がっていた。人の心には分裂がなく、嘘もなく、不安や恐れという概念すらなく、判断における誤りもなく、病気も存在せず、被造世界との真の共生があった。今となつては、このような世界は想像することしかできませんが、自分と世界において「これは本来の姿ではないのではないか」と感じていることを修正してみると分かってくる面があります。本来人間に具わっていたはずの能力や健康、抑止力など不要であった社会、遺伝子が組み換えられていない動植物。今は何かがおかしくなっているのです。おかしいと思いつながらもはや修正不可能なところまで来ており、世界は後代になればなるほど原型を失っていくでしょう。造られた当初世界に満ちていた神の栄光が見えなくなっているのです。

しかし、それではなぜ人は罪を犯したのか。罪など入り込む余地なく神は人間を創造して下さらなかつたのか。答えの冒頭では「**神は人間がそれを行ないうるよう、お造りになった**」と言われていました。「行ないうる」ということばの裏側には「行なわない可能性」も残されているかもしれません。神のことばに聞き従うか否か、神は選択の余地を残されたのです。従順を強制するのではなく、自由意志によって神に従うことを求められた。今日の箇所では、行動の主体（選択権）は人間の側に置かれています。

答えの第二のポイント、「人は悪魔にそそのかされて自ら不従順の道を選び取った」。ここでは、人を欺いたのは悪魔であったと言われていました。悪魔の目的は、神に代わって自らの王国を立て上げること（自分が神になること）。その目的に人間を引きずりこもうとしたのです。しかし、それでも悪魔は誘惑しただけであり、人間には選択権が残されていました。悪魔の声を斥け、神に従うこともできたのです。悪魔は「こんな道もあるよ」と呈示してきてただけでしたが、人間はその道を選んでしまいました。「人は〔**悪魔の煽動によって、**〕故意に不従順となり」と注意深く言われています。人は誰でも自分の意志によって罪を犯すのです。

答えの第三のポイント、「人は子々孫々に至るまで善を行なう力を失った」。アダムとエバは、物事を選択するとき、何が真に正しいのかが分からなくなっていました。やろうとすることに常に悪い動機が入り込んでしまう。もはや根本的に善が選べない存在になってしまったのです。そして、彼らから生まれる子孫にも同じ性質が受け継がれていきました。子どもたちにも悪魔は同じ問いかけをしてくる。「私と一緒に素敵な王国を築かないか？」と。神の支配を脇に置き、神の戒めも無視する。人間の欲望だけが物事を判断する基準となる。「**自分自身とすべての子孫からこれらの賜物をだましとってしまった**」。善を選び取る力とは「**賜物**」であったのです。しかし、その賜物を人は自ら手放し、悪魔が差し出す果物を選択しました。

神から「善なる性質」が賜物として与えられていたとき、人は自分の行動に対する責任を取る

ことが当たり前になっていました。自分が行なうことは誰のせいでもなく自分が選んでやったことだという認識が、100パーセント具わっていたのです。しかし、悪魔の声に聞き従ったその瞬間から、人は第三者に責任をなすりつけ始めました。

- ・ 人は答えた。「あなたが私と共にいるようにと与えてくださった妻、その妻が木から取ってくれたので私は食べたのです。」(創世3:12)
- ・ 神である主は女に言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたのです。それで私は食べたのです。」(創世3:13)

私はこのことを不思議に思ってきました。どうしてこの夫婦は真っ先に責任転嫁という罪を犯したのだろうか。この二人の言及をよく見ると、ここでは嘘をついているわけではないのです。アダムが言うように、エバを彼に与えてくださったのは神であり、そのエバがアダムに木の実を差し出しました。これは嘘ではない。エバが言っているところの、蛇が騙したので彼女は食べたというのも嘘ではありません。しかし、何かがおかしいのです。それは、自分の行動に対する責任をどうにか取らない道を探しているということです。神の目に自分の罪が顕である状況にあって唯一できたことは、責任を他者になすりつけるということでした。人は言い逃れができないとき、いくつかの選択肢があると思います。

- ① 率直に罪を認めて謝罪する
- ② 言い訳をする
- ③ 誰かのせいにする
- ④ 開き直る
- ⑤ 逆ギレをする

下に行くほど態度は悪くなりますが、アダムの言葉をよく読むと、これは「逆ギレ」と言っても過言ではありません。何せ、自分の過失を神のせいにしてしているのですから。エバは「③誰かのせいにする」に当たるでしょうか。いずれにせよ、この二人のうちには悔い改めの心がなかったことが分かります。

以前にお話ししたことかもしれませんが、私は高校時代に大変苦手な先輩がいました。部活のときに、なぜか毎日私にガミガミと言ってくるのです。実際、嫌われていたのかもしれませんが。しかし、ある日、私が何の言い訳もせず「すみません」と謝ったら、もうその後は何の追求もしてきませんでした。理由を聞かれもしなかった。おそらく、彼にとってはそこが大事だったのでしょう。今になって振り返ると、何と言いつつ言い訳や責任転嫁の多い人生を歩んでいたことか。キリスト者となってそのことが分かるようになりました。いつも逃げ道を探していた自分に、勇気をもって罪を認めることを主が教えてくださったのです。それができるようになったのは、御霊の働き以外にありません。問8の答えをもう一度引用します。「**私たちが神の御霊によって新しく生まれるのでなければ、その通りであります**」。

【祈り】

人に真実だけを求め給う、聖なる神よ。人に本来具わっていたはずの聖い性質は、根本的に失われました。多くの嘘で塗り固められた社会が形成されています。事実を見出すのに難儀し、それが発見されてもカネの力で再び闇に葬られることもあります。人はなぜ事実を隠したがるのでしょうか。心に闇があるからではありませんか。光なる主よ。私たちの心から闇を一掃し、光の子として輝かせてください。御霊の働きによって、このことを実現させてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人をご自身のかたちに、聖い存在として造り給うた、父なる神の愛、
闇の世に光をもたらし、人を新たに造り変え給う、主イエス・キリストの恵み、
神の御心に聞き従う自由、自らの行動に責任を取る自由に生かし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。